異色の教育（元・2・18）

――人権の確立を目指して――

米田　貞一郎（昭6文甲）

ご紹介頂きました米田貞一郎でございます。自分の体験を大勢の前でお話するのは、私は好みません。しかし、二、三年前に私達の尊敬する同窓の、この「集い」のお世話をしてくださっておりました、そこにおいでの米谷先生から「お前の体験めずらしいから一遍話をせいよ」とおっしゃってくださっていたり、また昨年の秋に、今ご紹介をくださった井垣さんから「『校長ありき――伊東茂光と崇仁教育』という本を読んだら、お前の名前が出ている。これを一遍話したらどうか、もうこんなことを話す者はおらんで」と、お勧めがあったものですから、ここに立ちました。これまでの皆さん方のお話とは随分違っておるものですから、また、大先輩もおいでになる。私の上司であった田杉先生まで来ておられるので、いささか気がひけるのです。しかし、先程の紹介にもありました様に、陸上部の連中がこの前にいて下さるので大変心強いです。それに、小学校で同僚だった広田可六先生もそこにいてくださいます。時間を割いて、広田先生からも崇

仁教育の経験をお話し頂きたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

題は「異色の教育、人権の確立を目ざして」としておきましたが、実は、異色の教育というより異色の校長といった方がいいのかもしれません。伊東茂光校長、私達は茂光先生といわずに、「もこうさん」といっておりました。この伊東茂光校長は、大正九年から昭和二十年まで二十五年間を、今日のいわゆる同和地区、被差別部落であります崇仁学区の真中にあります崇仁小学校に勤続されました。その間、地区並びに地区の住民の為に魂の入った独特の教育をなさいました。被差別部落の人達の背負っております運命といいますか、宿命に対してその宿命をはね除け、人権を確立することを目指して生死をかけられたのでした。この校長のもとに集まりました教師集団が、また捨我精進の道を歩みまして、そこにも他の学校に見ない教育実践を展開しました。昭和九年から十三年まで四年間余りその中のひとりとして経験をさせて頂きましたので、この話が今日的課題であります同和問題の解決に少しでもお役にたてばと、こうして壇に立たせて頂いているわけであります。

同和問題、同和教育といいますと、皆さん方もご承知と思いますが、これは単に一小学校の実践だけではすまない問題、同時にこの話をします場合は、社会的な、歴史的な背景を踏まえ、そこで人権確立の為に歩んで参りました道筋を併せて考えて行かなければならないと思うのですけれども、今日はとても時間がありませんので、崇仁教育ということだけでご勘弁を頂きたいと思

います。また同時に、同和問題につきましては、今日使ってはならない言葉があります。しかし、ここでの話はやっぱり古い時代のことがありますので、今は禁句となっておりますような言葉も出て来るかと思いますが、このことも予めご了承頂きたいと思います。

先ず崇仁学区の地理のあらましを申し上げ、ついで伊東校長の人となり、そして異色の教育といわれます学校経営について、その後、伊東校長が昭和二十年敗戦の日に退職を願い出られ、逝去されるまでのことをお話して、最後に私と崇仁教育とのかかわりということでまとめたいと思います。

崇仁学区の地理はご存じの方もあるかと思いますが、昭和四十八年五月現在の略図でお話しますと、北は七条通りです。その七条通りを挟みまして北に入った所と南に食い込んだ所があります。東は鴨川です。鴨川筋をずっと下って行きます。西は京都駅の東の筋、東洞院通りで、七条通りから南へ、東海道線・新幹線・奈良線を越えました向う、八条口駅の通りまで。南は八条通りで、その八条通りを東の方に進みますと、鴨川の手前でずっと南に下り、東九条通りの近くまで延びています。この区域の南部を、京都駅を発車をしました東海道線・奈良線・新幹線の列車が次々と東西に走っております。もう一つ地理的に特徴がありますのは、高瀬川がずっと鴨川と並行して流れて来まして、七条通りから崇仁学区の中に入ります。そのとたんに、西南に向いて曲がって行きます。そして河原町を越えるのです。河原町を越えましてしばらく行くと今度は南

に回ります。そして七条通りの次にある東西の広い道、塩小路通りを潜ります。それから直ぐ東南に向って流れて行きます。やがて鴨川べりに出、鴨川に並行して南の方にずっと流れます。つまり崇仁学区の真中をずっと蛇行、蛇の形のように曲って流れているのです。現在の崇仁小学校の運動場の中を高瀬川は走っているわけです。この地域全体が昔からの被差別部落、いわゆる同和地区なのです。

この地域の真中にあります崇仁小学校は、その前身を柳原小学校といい、明治六年に創設されました。当時、学区の戸長をしておられました桜田儀兵衛さんの尽力によるもので、今この方の顕彰碑が残っています。児童百二十人という小さな学校から発足したのですが、だんだんと充実して、高等小学校ができ、裁縫女学校も併設されました。大正七年に、この地区が京都市に編入されまして下京第三十八学区となり、東七条という町名変更と共に学校名が崇仁尋常小学校ということになったのです。崇仁とは珍しい名前ですけれども、これは平安京の左京にあった坊の名前で、「左京に崇仁坊あり、七条から八条に至る」と書かれているものです。京都市に編入されました時分の児童数は八百十五人ということでしたが、なかなか難しい学校であったようです。当時の学校行政制度は学区制というのがありまして、その学区、学区で教育財政を賄っていくしくみになっておりました。その地域の中から選ばれた委員と学校当事者との間ですべて相談をするのですが、地域の人々にはある制限を伴った住民税というものが課せられて、それが教育費に

当てられていました。豊かな学区は豊かな教育財政、教育財源がありますけれども、この崇仁校のような地域では容易に学校を支えられなくて大変困っていました。そういう状態ですので先生方の定着といいますか、先生方もなかなか落ち着いてやってくれない。校長先生も、この伊東校長で十一代目ですけれども、それまで十代の間で殆んどの校長が二年乃至三年で替わっております。たった一人だけ、二十年勤めた校長がいるのですが、一年で替った校長もいます。何故そのように居着かないのかというと、先程のような教育財源が非常に少ないということもありましたが、地域の人達の、言わば民度にもよったのだろうと思います。この伊東校長が参ります前にも、校長が辞めましてその後任に非常に困っていたようであります。たまたまこのことを聞かれました京都男子師範学校の先生で竜野定一という、後には視学官にもなられた方が、同郷の鹿児島県人である伊東茂光先生に白羽の矢を立てたのであります。この伊東先生に白羽の矢を立てます前に「何故ここには校長のなりてがないのだ」と尋ねましたところ、ある人がこういったといいます。校長が夜、学区内を歩くと夜脛があぶない、どこから何が出て来て足を刎ねるやわからん、といったということです。校長がそういうふうに安心できないばかりか、先生方にも実に雑多な人がいて大変困ったといわれます。ある人は昼間から酒を飲んで教壇に立っているかと思えば、教員室でお互い同志に喧嘩をしだす先生もいた。このような学校の校長となると余程立派な人でないとやれないと思われた竜野先生の頭に、伊東先生が浮んだのだそうです。伊東先生は、当時、

京都大学の図書館の職員で、同時に崇仁校の校下にあります青年団の法律相談の顧問をしていました。この時、三十四歳でした。三十四歳の新人を校長に引っ張って来ようとしたのですから、余程優れたものを伊東先生の中に認められたのだと思います。

ここで伊東先生の生い立ちを申し上げることにいたします。伊東先生は明治十九年七月二十七日に鹿児島県の西の方、日置郡日置村に生れました。お父さんは島津藩の典医の息子さんで、家業を継がれ医者を開業しておられました。このお医者さん、いわゆる世事にうといところから、医業の経営の為に事務員を雇っておられましたが、その事務員が伊東家の財産すべてを握っており、ある日、印鑑をもって逐電してしまったというのです。伊東家は一夜にして貧窮のどん底に落ちられました。この時、お子さんが三男二女、茂光先生はその三男でありました。この鹿児島というところは、ご存じのようにある意味では封建意識が強いところで、かつての武士、いわゆる士族と平民の間には大きな隔たりがありました。同じ士族の家に生れた子どもでも、長男は家を継ぎ、士族である。その他の者は皆平民となるというしきたりがありました。伊東家でも長男は士族として家を継がれました。次男は寺師という士族の家を継がれ、寺師義信といわれました。いわば士族の株を買うという形で外へ出られたわけです。三男の茂光先生にも、どこか士族の家に養子に行かんかとの話が出たそうです。ところが先生は、「わしは伊東の家に生れたんだから、平民でもかまわん、伊東のままで結構だ」といわれたのです。小さい時から大変乱暴者といいま

すか、全くの自然児だったそうでして、頭は良いがやんちゃなことにおいては周囲の人々がびっくりする程だったということです。

兄さん方と同じように鹿児島一中を出られましたが、この時分に家産を失ってしまわれたものですから苦学の道をたどらざるをえなかった。牛乳配達から始めたということであります。七高に進み、七高でも苦学をして四か年間かかって卒業し、京都に出て来て京大法学部の法律学科を志しました。これには、自分の親父さんの家産をすっかり奪ってしまった、あの悪い事務員の復讐をしなきゃならん、こういう悪人を世の中にのさばらしてはいけない、そのために法律を勉強する必要があると、こういう考えがあったといわれますが、同時に、鹿児島人の根性といいましょうか、とにかくど偉い者になるんだといって国を出る、あの茂光さんならきっと偉い者になるだろうという郷党の注目にも応えねばならんと考えられたんだと思います。京大に入られましても学資がありませんので随分いろんな苦労をしながら勉強されました。卒業までに六か年間かかりました。その中の一ツのエピソードでありますが、借金の取り立てに来る人達から逃れて京都の東の牛尾山のお寺に逃げこんだ。お坊さんが事情を聞いて、「それじゃあおいてやろう。しかし、ここも豊かではないから、お前も托鉢をせよ」ということで、托鉢に出かけた。家々を廻っておりましたら、ある家でお経をあげてほしいと頼まれた。これはまた大変なことになった、お経は一つも覚えておらないしと思ったが、遂に腹をきめて、仏前で教育勅語をお経らしく唱えた

ということです。こういうエピソードを数多く残しながら、とにかく大学を出られました。大学での勉強の中で一番後まで心に残っていたのは、佐々木惣一先生の講義だったと。佐々木惣一先生は、ちょうど、その頃に海外留学から帰っておいでになられたのですが、その先生の顔を見、その声を聞き、その謦咳に接することだけが自分の一番の大きな勉強だった。その正義感というのか、その俠気には自分は本当に打たれたといっていつまでも先生に私淑しておられました。

伊東先生は、ど偉い者になるんだと決心をして鹿児島を出て来られましたが、第一次世界大戦の後の騒然たる世の中を眺め、自分は一つ北樺太へ出掛け、私兵をもって占領し、それを国に献上するのが唯一の奉公の道だと決心されました。この望みは大正九年、尼港事件の報復措置で政府がサガレンを占拠しましたので、不発に終ったのであります。たまたま、こうした所へ崇仁校の校長にならんかという話があったというわけです。余りにもかけ離れた話で、大学の法学部を出ながらわしはなぜ小学校の校長にならねばならんのかと考えて、悩まれ、思案されたそうであります。この時一番に頭に浮んだのがお母さんのことだったそうでして、家産を失われた後、お父さんも失意のうちに亡くなられ、一人で息子の将来の出世を楽しみにしておられたお母さんを考えると、小学校の校長ではという気持が強くしたといっておられました。また一方で、これで郷党の期待に応えられるだろうか、次兄の寺師義信さんは陸軍の軍医として航空医学を勉強され、後には軍医総監までされた方ですから、その兄と比べられてと、悩まれたようです。更に、郷土

の名門でもあり、一門の方が皆なかなか優れた方ばかりであります。後年ＮＨＫの会長をされた古垣鉄郎さんも一族のひとりでありますが、そういった方の中で、小学校の校長ですますのかと悩んだあげく、恩師佐々木惣一先生を訪ねて行かれました。図書館職員に世話をしてもらわれたのも佐々木先生であったそうですが、佐々木先生は崇仁校の話を聞かれて、「それはお前、適任じゃないか、やんなさい」といわれ、いよいよ決心がついたということです。もう一つ、伊東先生の決心を確かなものにされたのが奥様だったそうです。まだ新婚間もない頃だったのですが、十歳もお若い奥さんのトキさんが「小学校の先生、よいではないですか。やりなさい」といわれたのです。この奥さんは、淀藩の家老家の出で、小さい時から文武両道をたしなまれ、非常に聡明謙虚なお人柄でした。先年九十歳でお亡くなりになりましたが、最後まで伊東先生の後を慕い、内助の功をおさめられました。

伊東先生がこうして校長就任の決心をされ、京都市の教育当局に出向かれましたところ、教育当局では、一年でもいい、二年でもいい、とにかく校長をやってくれという話をしたそうです。それに対して先生は「それはけしからん。一年、二年の校長を頼むなんて教育に対する冒瀆だ。わしは十年でも二十年でもやりますわ。素ッ裸でこの聖業をやらしてもらいます」と啖呵を切ったということであります。ところが当時は、帝国大学出身の学士でありましても小学校正教員になる資格はありませんでした。訓導という免許状は師範学校を出た者しかもらえません。伊東先

生も無免許ですから教育当局は困りまして、直ちに便法を講じました。その時分に京都市の教育顧問をしておられた小西重直先生、これは京大滝川事件の時の総長であった教育学専攻の小西先生でありますが、この小西先生の所に依頼して、教育学、教育行政学、法規等の特訓を受けられることになり、直ちに訓導の免許状が出されたのです。たまたま小西先生は七高の教授を前にしておられました。そんなことからも伊東先生とのつながりがうまく行ったのではなかったでしょうか。

ここでいよいよ崇仁小学校校長の発令となったのですが、伊東先生に対して初任給は百五十五円だったといいます。当時小学校の先生方の初任給は五十円から六十円というところでした。この破格の待遇については後にまた出て参ります。ところで伊東校長、三十四歳。その体躯たるや二十貫もあり、堂々たるもの。顔は誠に精悍。それに、京都帝国大学法学部出身の校長ということで、時の京都市教育界は大動揺を来たしたということです。当時、小学校教員の正統なルーツというのは師範学校卒ですから、伊東校長は師範閥を打破する為に来たんではないか、なかには彼は部落出身ではないか、と陰口をたたいたといいます。また部落の中でも、今度の校長はえらい高給取りだ。これはどうも部落を利用するんではないかというような色眼鏡で見られたということです。当時、警察は学校教育の場によく介入をして来ておりましたが、警察署でも、彼は社会主義者ではないかというような批評が立ったようです。このことが伊東校長の耳に入りました

が、先生は、「そんな中傷や毀誉褒貶は気にしない。とにかくわしは損得なしにここへ来たんだ。教育というものには損得はないんだ。損だとか得だとかいうことは、教育の場では言ってはならないし、損と知ってもやらねばならんことはやらんならんのだ。わしは真っ裸の真剣勝負で来ているんだから」と、若い人や周りの人達に述べておられます。これは伊東校長が就任後十年ばかりたった頃ですが、朝日新聞が先生のことを取り上げて大きな記事にしているのです。大変面白いので、お許しをえて読んでみます。朝日新聞の昭和五年一月三十日付です。「数多い市内小学校長中の変り種の一人たる伊東茂光さんは、いろいろの点で特色を持っている。まず資格でゆけば、特別俸中の最高俸者、月給二二〇円を受けているが、それというのも一ツは京大出の法学士という肩書付きなんだから。しかし、実のところ伊東さんは学士らしい素振りを見せない。最初から東七条崇仁小学校に教鞭を取り、教育の傍ら熱心に地方融和事業に手を染め、一は内的の自覚を高め、一は外的に誤った差別観念の撤去に奔走している。いつの異動期にも決して伊東さんが他校に転じないわけだ。年中和服で通して洋服を着ることの滅多にないのも、ちょっと他では見られぬところ。どうして洋服が着られぬのかと聞いてみたら、「一応作ってはあるが、どれもこれも一六銀行に入っています。特別俸まで貰ってお恥しいことですが、仕事がらいろいろと失費もあり、地方改善問題で鉄道省に猛陳情運動を試みた時分、私費の借金を作り今もその返済に追われている。だから所持品中の最も高価品たる洋服は、いつも悲しい所に納めています。」と

の答え。四大節や儀式の日には登校のみぎり、その悲しい所に立寄ってフロックに着がえ、式をすませての帰りにまた立ち寄って脱いで行く。これでこそ初めて伊東さんの和服の意味が解けるというもの。伊東さんはまた一切の平等主義者である。即ち目上も目下もなく、小使を呼ぶにも「さん」づけなら給仕を呼ぶにも「さん」づけだ。これは一つは伊東さんが鹿児島生れというところから、土地の習慣もあるにはあろうが、只それだけで片づけてしまうべきものではない。すべての人を尊敬しているところからこそ出たことだ。懐中には常に市長宛の辞職願を納めて、あくまで目的の貫徹を計り、もしもそれができぬ時には直ちに辞表を送って然して後、係役員の面前で腹カッさばく決心だったのだ。この意気が遂に報いられて、付近改造となり踏切で死傷する悲惨事をみぬ様になった。当時はまだ高かったハイヤーを乗り廻し、日々六、七十円の失費を作ったとか。……」

以下略しますが、こういう記事が書かれております。

先生がいよいよ校長となって学校へ来られた時、一番びっくりしたのが校舎の粗末さで、同時にこれは学区制による貧困さに基づくものだと考えられたそうです。反面、とても自分は嬉しかったと言われたのが子ども達のやんちゃ振りだったそうです。自分の小さい時を思いだし、こういう元気な子ども達を前にして、自分はこの学校の校長だと思った時に、本当に自分の将来に希望を持ったということでした。そして先ず、学校の施設を何とかしなくてはいけないと思うと同

時に、校区内に流入する人口の増加、従って学童の急増に対して頭を使われました。大正九年から昭和の初め頃にかけて約十年の間に一・五倍の児童の増加、こうなってくると校舎が足りません。校舎の改築、増築、新築。伊東校長は在任中に七回もこれらの工事をされました。しかし鉄筋校舎は建ちませんでした。木造建築ばかりであります。その木造建築も決して新しい木材ではなかったのです。大正十三年のことです。ちょうど隣り、枳殻邸の北側に稚松小学校という古い小学校がありまして、これが鉄筋校舎に建替えるということで、木造校舎を壊しにかかりました。それっというので、伊東校長はその木造校舎の古材をもらってきて自分の学校の校舎を建てられたのです。その新校舎を、後々まで、稚松校舎と呼んでおられましたが、教育は入れ物に左右されるものではない、吉田松陰の松下村塾を見習おうとよくいわれました。昭和二年には大きな講堂ができましたが、これも木造でした。千人余りも入れる講堂でした。ちょうど賀茂川べり、土手のすぐ下にあったんです。この講堂ができました時に大変喜ばれ、こういう檄文を子ども達の前に貼られました。「立て、一千の児童よ、汝らの将来には光あり。進め、汝らに栄光輝く日近づけり。」というのです。そして、大講堂竣工祝賀会を開かれました。町民たちと一緒になって、子どもたちの学芸会、運動会、夜は町民との大宴会がありました。町中を旗行列もしています。伊東校長はその事についてこんなにいっています。自分ははでな事をやるのは好きじゃない。みんなの前に出るのはいやなんだ。みんなの前に出る事をするなともいっている。しかしその反面

で、なぜこんな大祝賀会をやるかというと、それは町民の教育関心を高めるためなのだ。これで学校というものの、また、教育というものの意義を知ってもらいたいのだ。それと同時に、子ども達もその背負っているあの差別に対して、それをはねのけていかなくてはならないという力を鼓舞するのだ。士気を鼓舞するためにはこれをやらなくてはならないといわれるのです。そして、七回もあった造改築の度に祝賀会を催されました。昭和六年、校門を入りました正面に二階建の本館が建ちました。これも勿論木造です。この時竣工を祝って、校歌「我等の歌」が制定されました。同校の先生が作られた実にすばらしい力強い歌です。声高らかに唄いたいところですけれど、今は文句だけ聞いて下さい。「㈠黒き大地を破りて出でぬ、見よや、溢るる我等が生気、今に伸びるぞ正しく強く、我等は若葉崇仁校　㈡天を仰ぎてただ一筋に、すさぶ嵐に撓まず折れず、雄々しく立てん誠の柱、我等は若葉崇仁校　㈢いざやわが友、この学び舎に、教え守りて弛まず励み、皇国(すめらみくに)の良き国民(くにたみ)に、我等は若葉崇仁校」というものです。今は皇国を「平和日本」と改めています。伊東校長はこの校歌を定めると同時に校庭に大きな公孫樹を植えました。ちょうど校長室と職員室の前で、年々大きく伸びました。この公孫樹は、伊東校長が自分の生れた家のそばにもあったという想いをこめて植えられたものですが、退職される時にこの樹の下に自分の髭、髪をそって埋め、学校を去られました。

伊東校長は、こうして学校環境をよくされましたが、学校環境だけでは教育は進まない。学区

内を眺めた時に、行政差別による産業、交通、住宅、環境衛生などのおくれが目につく。これらを何とかして改善しなければならないと考えられたのです。そこで一番に手をつけられたのが「国鉄東海道線・奈良線を横切る第一踏切を隧道式・トンネル式に改造するための請願運動」でありました。現在、河原町を下って行きますと、七条通りの次、塩小路通りから道幅が狭くなります。そしてずっと鉄道のガード下を通って八条通りに出て行きます。ところが、以前はこのガード下がなくて、京都駅から東二百米の第一踏切でした。ですから、京都駅構内を通行しているのと同じ観がありました。その上、機関車の入れ替え、空車の操縦などもみなこの場所で行われるものですから、踏切は一日の内六時間余も閉鎖され、「開かずの踏切」とさえいわれていました。伊東校長は、「今や学区民は経済的にも精神的にもこの不利不便に堪うる能わず、また思慮なき幼童がいつ変事に遭遇するやも知れぬ」と憂慮するとともに、京都市の南部発展という万年の大計からも熟慮して、この踏切を隧道、トンネル式に改築することを請願しようと決心されました。そして、区内有志者や青年団員らの協力を得て、第一踏切利用実態調査を前後三回、昼夜にわたって行ない、区民の総意をくみ、大正十一年二月二十二日、学区内諸役員九名連署の請願書をまとめ、馬渕鋭太郎京都市長に提出されたのです。請願書は理路整然、堂々たる論調で述べられ、伊東校長の面目躍如たるものでありました。

京都市長に請願書提出後、自ら、市当局は勿論、市会議員らを何回も訪れ、更に神戸鉄道局に

陳情して協力を取りつけ、同年七月には上京して鉄道省に陳情。兄寺師義信軍医が在京していたことや薩摩の「いもづる」閥の便を得て、大木遠吉鉄道大臣に直訴されることになりました。大木大臣との間には、早い機会に現地視察をしようという約束ができたそうですが容易に実現せぬうち、大正十三年九月の関東大震災で大臣が更迭。同年十一月山ノ内大臣に膝詰談判をして、遂に第一踏切隧道化の実現をみるにいたりました。この間、伊東校長は、「断」の一字あるのみ、死して後やむの覚悟で、上京陳情の際には、学校教職員と別れの盃を交して出かけられたものです。

町内の改善はまだまだ続きます。これもやはり、その当時の差別された同和地区の状態を物語るものでありますが、七条通り河原町を東へ、高瀬川を越えて少し行くと鴨川の手前に南へ下る、現在は自動車も通る広い道があります。これを須原通りといいます。この通りの入口が、大正終りの頃まで七条通りに面してずっと家が建っていたので通じていませんでした。したがって須原通りは、七条通りに面して建っている家の後で止まっていて、地区内の人達は南から来てその家で止まった所から東か西に別れ狭い道を廻り七条通りに出たものです。その七条通りに建っていた家は部落ではなかったのです。伊東校長は須原通りを七条通りまで直結するために請願運動を展開されました。大正十三年三月、京都市議会で請願が採択され、ついで水野練太郎内務大臣へも働きかけてとうとう解決をされています。

それから八条通りを伏見街道に直結する四間道路の新設、塩小路通りの拡幅、町内下水道の完全改良等々は、大正十四年末までに伊東校長が先頭に立った請願運動の成果であったのでありまず。少し後、昭和六年には高瀬川にかかっている地区内の橋の台を低くする請願をされました。高瀬川は崇仁学区内を蛇行し、かつては荷物を運んでいました。従って、その上にかけられた橋は地面よりも高く大きいものでした。それが荷物を運ばなくなって久しい昭和六年のころにまだ昔のままでした。実は崇仁地区より上流では、すでに早くから橋台は低くなって、大きな道路に変えられていたのです。同和地区では昔のままに放置されていたという差別、同和行政の遅れをここにも見たという事です。伊東校長は、このように一つ一つ課題を解決し、環境改善が教育にとって如何に大切かということを示されていきました。

こうして、いよいよ先生独自の異色の教育が展開されたのです。その学校経営ぶりを逐一お話する時間はありませんので、崇仁教育に花が咲いたと私達が考えております時代、昭和十四年十一月に伊東校長がされた講演の速記録を読ませていただきます。当時は皇国民錬成の時代ですから、精神主義・鍛錬主義が強く出ていますが、一人ひとりの子どもに、差別に負けない力を、正しく生きる力を体得させ、将来の日本を背負っていくんだという自信を身につけさせようという理念のもとに、独創的な実践を推し進めているのです。

「わが崇仁教育は謂れなき因襲の打破に立脚します。因襲打破は畏くも明治天皇のご趣旨に基

くものであって、特に五ヶ条のご誓文の宣布と共にお下しになったご宸翰の「天下億兆、一人モソノ処ヲ得ザル時ハ皆朕ガ罪ナレバ」と仰せられたご聖慮を拝し、私共にはそのご聖旨を奉体する事それ自体が宗教ともなっているのであります。

そのためには私共は勿論一命を投げだします。それ故我が崇仁教育の本領は差別も貧乏もあらゆる苦難を天恵とし、奮然立ってこれを清算し、もって忠良の臣民となるべき人物を養成するにあります。故におざなりの生ぬるい教育でなく、火花の散る真剣勝負であります。即ち堂々と戦って決して負けてはならんのであります。

十数年前私は赴任当初、忘れ得ない数々の事実を見ました。ある時は全市連合運動会に於て我が校の選手が実に無惨な敗北をしているのをみせつけられました。又ある時は卒業生が中等学校に入学してから学友の差別賤視にたまりかね涙をのんで続々退学する実情を目撃したのであります。これではどうしても自暴自棄に陥り、又ひいては全校の意気も沮喪する結果となるのみならず、長じても善良なる公民とはなれない。ましてや本校の宗教ともいうべき因襲打破も到底望まれるものではないと考え、あくまで強く正しい精神を打ちこんで心身を練磨し、我等こそ陛下の赤子たる確信の下に全校の意気をあげねばならないと考えたのであります。

私は常に本校を学校としてよりも、むしろ一家族と考えています。否、むしろ学区全体を一大家族と考えて、この大家族の向上発展を念願しているのであります。過去に於て道路の開鑿

等に幾多の苦酸を嘗めたのも住みよき我等の町を作り、教育上の環境をよくせんがためであります。又同様の意味で本学区の平和という事についても常に注意を払い、ある時は言いにくい事も断固として町のために言うことがあるのであります。

この様に学校下を一大家族と考えておりますから、千六百人の児童には他人行儀などしません。皆自分が生んだ子と考えて教育しつつあるのであります。」

とこう述べて、以下、具体的な教育方法が開陳されていきます。

能力別学級編成を採り、精神薄弱児学級も作って、夫々の子どもの力に適応した教育を行い、四年生以上の男子には剣道を必修させ、また厳寒期にもストーヴを用いず、心身の鍛錬を図った。一方、静室を設けて崇仁魂練磨の聖堂とし、運動特に陸上競技を奨励して全校の意気の高揚を図り、職業教育の場として印刷機械を置いて技術訓練をしたり、農園・禽舎で勤労精神を養わせた。情操を育て個性を伸ばすために、唱歌部、書き方部、手工部、珠算部、図書部なども設けた。他方、貧困家庭の子どもの欠食対策として、熱いみそ汁を給食して饑じい思いをさせることを防いだり、貧困家庭の出産に助産婦の資格をもつ職員を派遣する産婆部まで設けた。と、説明した上で、以下のように結んでいるのであります。

「以上述べました如く、学校に於きましては鍛錬を以て一貫しております。しかるに本校尋常科卒業生にして上級学校に学ぶものは僅々一割五分にすぎず、他の大部分をそのまま実社会

に送るにはまだまだ物足りぬ感がいたします。我々の手によって尋常科から引継いで猛烈に鍛えねばならぬと痛感して昭和十年度から高等科を併置したのであります。かくして卒業した後も、我が卒業生を待ち受けるものはただ難問のみであります。従来地区の職業は非常に制限せられ、しかも漸次衰滅の状態にあります。たまたま、かろうじて他の職を得るともそこには冷たき差別待遇が執念深くつきまとって永続きを許さず、転々と職を転じねばなりません。かかる実情の下にあってこの難関を突破し世に処して行くことは実に困難中の難事で、余程の勇気がなくてはなりません。意志の弱いものは、ひとたまりもなく落伍して、人を恨み世を恨む敗残者とならざるを得ないのであります。我々が正しく強くを強調する所以は実にここにあるのでありまして、我々は世の冷酷をむしろ天の試練として敢てこれを突破し、猛進する強烈無比な日本男子を作らねばならぬのであります。故に高等科に於ては特に酷に過ぎる程の鍛錬をします。しかしてその職業補導の如き担任訓導は実は血と涙の奮闘をなし、我等の戦士として職業戦線に送っております。我等のこの涙は必ず天に通ずる事を信じます。然らざれば我等は死ぬにも死ねないのであります。」

と、全教員一丸となって、心血を注いで同和教育に当っていることを述べたのです。

この講演速記録は学校紹介用の小冊子『崇仁教育』に収められたものですが、伊東校長はそれまで一切学校の宣伝をしない方針でした。それが、昭和十七年八月、文部省主催「日本諸学振興

会講演会」で、「同和問題と教育」と題して先の講演と同様な堂々たる大演説をされますと、それ以後、学校への参観者が後を断たずという状態でした。しかし、伊東校長はこの参観についても、「ちょっと見物というような参観はごめんじゃ、来てくれるな」といわれ、「学校のことは他からとやかく言わせない。たとえ視学といえども勝手に見せはせぬ」と、教権の確立ということに深く意を用いられました。

それだけに教職員に対する期待感は大きくて、「先生は受持の子どもに打込んでくれ。外の事はみな私が引受ける。」「委したからにはしっかりやってくれ。外から邪魔するものがあればはねのける。教権を守れ。教権を失った時は最後と思え」と諭されるのです。私も初めて先生にお会いした時、「子どものために思う存分やって下さい。後は私が引受けます。」といわれ、感激しました。今でもそのことを忘れません。そして、伊東校長はいつも優秀な先生を集めてこられました。以前は先生のなり手がなかった学校ですのに、若くて元気のよい先生がたくさん集まっていました。永年勤続者も多く、三十余年勤めあげた女の先生もいます。学歴にとらわれず、履歴もいろいろで、一時、京都帝大を出た先生が六人もいました。広田先生もその中のおひとりです。従って、参観者に与える印象も強烈なものがあったでしょう。ここへ来ると迫力を感ずるとよく言われました。

しかし、こうした異色の教育が進んでいきますと、外では、この崇仁教育に対して批判する声

が随分ありました。あれは部落だからやれるのだとか、あれは型破りだ、学校教育の枠を越えているんではないかとか。それと同時に、在学児童や卒業生に対する差別も厳しいものがありました。例えば、先程の陸上競技部の活躍ですけれど、その活躍は年々すごく、京都市内は勿論、全国の学童競技会に出ていきまして、昭和十七、八年頃には校長室に八十本からの優勝旗が飾られる程でした。こうなるとまた、他の学校では嫉視の目とともに、「崇仁は犬を食べるから走るのが早い」などと陰口をきいて差別をするのでした。

また、京都駅の構内でも、遊んでおりました崇仁校の子どもが駅員から「お前ら崇仁やろ、出ていけ」と、差別扱いを受けました。また、すぐ近くの女学校で、卒業生が「あんた崇仁の出身やろ、今日の弁当は何え」と、毎日弁当をのぞきこまれ、嫌な辛い思いでいることをかつての担任の先生の処に手紙で訴えてきたというのです。手紙のなかには「伊東校長先生が卒業の時に、どんなに差別をされても負けてはいかん。その度に校歌「我等の歌」を唄って辛抱せいといわれたので、その事を自分は一生懸命守っています。絶対に負けません。でも悲しいです。」と書かれていました。ほんとうに胸が詰まり、張裂けるような思いがいたします。伊東校長は、こうした差別事件に気付かれると、直ちに差別者の所に出向かれ、強く反省を求め、謝罪文を公開させ、同和問題・同和教育への理解と実践を促がされました。

伊東校長がこうした経営を進められた中で、心にかけられた今一つのことは、次代の教員の養

成問題でありました。先生は、京都師範学校の先生方の理解と協力のもとに、卒業期を前にした学生たちに学校参観の機会を用意されました。いわゆる教生参観です。ただしそれは、単なる一時間や二時間の参観ではなく、一日中、学校に勤めるつもりで来てもらい、午前中は崇仁校の先生方の授業を観、午後は崇仁地区内を廻り、先生方と情報交換をし、夜は一緒に会食をするのです。その夕食は、先程お話した大講堂にゴザをしき、こんろを置いて、先生方と膝を交えてのスキヤキ・ホルモン料理です。それは大ご馳走です。ところがその際に、ステージでは伊東校長初め崇仁教員が劇をやるのです。伊東校長自ら西郷隆盛になりまして、大きなお腹をしてられましたがその大きなお腹に白い帯をまいて絣の着物を着、あの上野の山に立っている銅像になったり或いは城山で最期を遂げる場面まで実際にやって見せられるのです。その外色々な劇をやる中で、教育はこうあるべきだ、同和教育というのは腹から腹へ信念をうつすもので、理屈じゃない、実践だと語りかけられたのです。この教生参観は長年続きましたので、この参観経験を持った人が今、全市にも府下にもいます。私も、時に、崇仁校に勤めていたといいますと、伊東先生にスキヤキを頂きましたという人に出会います。徳は孤ならず、また広いものです。

さて、敗戦からの伊東校長についてお話をいたします。昭和二十年八月十五日、敗戦の玉音放送があった後、先生は「今まで自分は米・英鬼畜と言って子ども達を戦場に送ってきた。不明だった。」「これからアメリカの占領軍の支配を受けてその命令下に動くという事を考えるとたまら

ん。こんな姿を子ども達に見せるわけにはいかん。ただ先生方は、どうぞこのままで、子ども達の先々を見届けてやって下さい」と言い残され、九月二日に辞表を書いております。そして京都市教育当局にこれを送られたのです。市の当局がこの辞表を受取ってから、決裁をするのに随分時間がかかりました。その間、伊東校長は一体当局は何をしているのだ、こんなに時間をかけている様だから、戦争に敗れるんだといわれたと聞きましたが、翌二十一年の二月六日に遂に退職辞令が出されました。

この時、先生の送別会を兼ねた遠足会がありました。この遠足に参加された先生が坂を登られた時に、後からは卒業生の女の子たちがお尻を押したそうです。その子ども達の顔を見られたら汗を一杯流していたので、先生が自分のハンカチを出して「さあ、これで拭きなさい」「拭いて、さあ返しなさい」と言われたら、卒業生が「先生の汗です。記念に下さい」と言ったというのです。送別会には佐々木惣一先生も出て来られました。

その後、伊東校長は学校で身の回りのものをかたづけ、先程申し上げた大公孫樹の下に自分の髭を剃って埋められました。長い髭でしたが、その髭をのばしておられたのにはわけがあるのです。それは、先程申し上げた他の学校で差別事件があった時、事を表沙汰にするなと警察や憲兵が抑えた、これを非常に残念に思われ、先生はそれから一切髭を剃らんといって最後まで伸ばしておられたものなのです。

伊東校長は引籠っておられたのですが、和歌山県の被差別部落の青年や教員達が、部落青年のために土地を開墾して、そこで人材を育成するので指導を求めてきました。先生は和歌山県日高町に出向かれて自らも小さな土地を開墾されました。しかし、それは非常に困難な仕事で、先生の健康をむしばんできました。先生は二十二年、京都に帰られて、弁護士の登録をされ、開業されました。ところがその弁護士たるや、貧者の味方ということで、弁護をされても弁護料をとられません。崇仁地区の人達で罪を犯した人が裁判となりますと、伊東先生に弁護を依頼し、又先生は進んでその弁護を引受けられたのです。そして、「罪を問われるようになったのは、自分の教えた教育が悪かったんだ、自分の教育指導が至らなかったんだ、これは私の責任です。裁かれるべきはむしろ自分です」と、弁護をされたので、相手の弁護士は非常に困ったと言っています。そういう事で情状酌量、執行猶予がついたのがたくさんあったということであります。この弁護士をずっと続けられていましたが、病気のため昭和四十一年十二月十日、八十歳で大往生を遂げられ、今、相国寺内大光明寺に眠っておいでになるのです。

私はこの伊東校長の教育を僅かの間ですけれども体験をさせて頂き、教育がいかなるものか、同和教育がどんなものか、師魂を教えられました。その魂は、いまだに尚、私の中に生きています。大きな幸せだったと思っております。

伊東先生は、こうして大勢の人々に色々な形で感化を与えられましたが、同時に自分自身に対

して非常にきびしい方でした。「私を叱る」という語録を残しておられますが、常々、相国寺の山崎大耕老師に参禅、教を乞うていられました。また、佐々木惣一先生、小西重直先生への私淑は勿論のこと、来校された諸先生にも、不偏不党、広く教えをうけられました。歴史家喜田貞吉

先生、心理学の野上俊夫先生、教育学の木村素衛先生、成城学園の小原国芳先生、剣道師範津崎先生等々。全国水平社幹部の松本治一郎、北原泰作、南梅吉、朝田善之助の皆さんとの交流もあったようです。先哲偉人に対する敬仰の念も厚く、吉田松陰、西郷隆盛、中江藤樹、二宮金次郎、四十七士などの講話をうかがったことが屢々ですが、わけても仁侠の士、次郎長こと山本長五郎に対しては、官軍幕軍のへだてなく、その戦死者を葬った侠気を買われ、また校下の人が先生を次郎長と渾名していることを喜ばれ、校長室にその写真を掲げていられました。実に天衣無縫というべきです。私は、伊東校長から、一度他人の飯を食べてこい、そしてまた帰ってきたらと勧められ、東京の中学校に転勤しました。その時、私に下さったのがこの孟子のことばです。「断じて敢行すれば、鬼神も之を避く。」先生の魂のこもった書で、いつも座右に掲げております。

いよいよ広田先生に登場頂く場面になりました。広田先生、よろしくお願いいたします。

広田可六先生談　　彼（米田）は昭和九年から十三年まで。私は十一年一月十日から僅か三十五日だけ。崇仁校の女の先生のお腹が大きくなりましたので、彼が言う様に代用教員としてこの学校に関係したんです。しかしわずかな間でありますけれど、今の話の中で特に、更に、ふれたいと思うのは、伊東先生のすばらしいお人柄と同時に、そこに集まった先生達が正に天下一品だったと思います。今でこそ小学校の先生だと皆大学を出ないとやれないんですけれど、当時と

しては校長以下何人かおった先生が珍らしく資格がないんです。米田君もそうですが、私もない。京都師範の力が非常に強くて、京都府が小学校の先生、訓導としての免状を出してくれない。私は京大の心理学の卒業です。そんなもの当然頂いてもいいのに、くれないので、東京府まで行って無試験で頂いて、それで訓導という事になって、当時、代用教員だった給料六十円が、一ぺんに七十五円になった、大変嬉しい思い出があります。しかし、本当にこの茂光のもとに集まった連中はすばらしい先生でした。私はその後、京都市の視学に入りました。その前には、女子師範学校の先生をやっていました。その時に、絵画部を一番か二番だった優秀な連中をこの学校の先生に送りこんだ事があり、自分としてはこの学校だったからこそ入れたんじゃないかと思っていますが……。

とにかくやっぱり教育は人ですね。本当にそういう事をつくづく感じます。米田君はこのことにあまりふれなかったけれど、とにかく校長先生も偉かったが、その下に集まった連中が実にのびのびとですネ、本当にこう何か、今の話聞いてると皆かしこまって聖人ばっかりだったようだが、決してそういうものではないんです。私がこの学校に寄せてもらってた時に「呑海」という会がありまして、「呑海」の意味はわかりませんが、若い先生連中とよく飲みました。私もこれで三高以来相当なもんでしたから、何とかまあやらせて頂いたので、今、八十歳まで盃を離さずにやれるのも崇仁校の余徳であったと思います。どうもありがとうございました。

今、広田さんのお話にありました「呑海」というのは、教員中の若者集団でありまして、十数名、男のチョンガー連中。読んで字の如く、大海を呑む底の意気で、胸襟を開いての談論風発、痛飲、放歌高吟、興に乗っては乱舞もします。このさまを見て、喜んでいられるのが伊東校長でありました。

伊東校長自身が斗酒尚辞せず。三歳にして芋焼酎の洗礼をうけたという豪の者で、講演会に出られても卓上に冷酒を用意させられた程でした。私たち若い者は、先生から酒の作法、飲みっぷりを教わりました。しかし、呑海にも相当な者がいました。「勇将のもとに弱卒なし」とか、先生に「負けてなるや」と飲み競べを挑んだものです。

新採教員が「呑海」に入会すると、早速に洗礼式がありました。祝杯を徹底的に頂戴するのです。私も、会場の伏見寺田屋で、ダウン寸前までがんばったことでした。

また、よく「鳩会」というのがありました。夕方晩くまで連中が仕事をしていると、かねて承知の時鐘が鳴ります。職員室の真中の火鉢に、大きな鍋がかけられ、さつま汁が煮立っています。伊東校長の肝入りで用意されるので、一升瓶も並んでいます。校舎の屋根裏に巣喰っている鳩がつぶされていました。校下の青年団員が「おっさん（伊東校長のこと）、持ってきたでー」と、牛の臓物、モツを提供してくれるのも毎度のことでした。そこでもまた、教育談議、四方山話に

花が咲いたのであります。

「呑海」はまた、よく集団で旅行やハイキングなどをやりました。その度にいろんなエピソードを残しています。なににせよ、でかく、変ったことが好きでした。戦争中、先生方の入営、退営が続いた頃です。その入営・退営には必ず営門まで送迎に行くのです。それも、祝入営・祝退営と名前とを書いた大きな幟旗を用意して行って営門前に立てました。実は、私も応召・入営しましたが、その時こうして営門まで送ってもらいました。偶々私の入った兵舎が営門に一番近い所だったからでしょうか、私たちを迎えた新兵係上等兵も気付いていたとみえて、「あのでっかい幟はお前だったのか」と、一番に私の存在を認めてくれたことでした。

私の加盟後、第一回の「呑海」旅行は山陰道でした。女の先生方の見送りや菓子・果物・アルコール類の差し入れがありました。京都駅を出るからに一杯が始まり、やがて佳境に入りますと、歌も出、棚にたくさんのテープを釣り下げ、その先に剝いた果物の皮などをつるしまして、カフエ呑海がそこに開かれました。あまりにも騒がしかったからでしょう、車掌さんに注意を受けるまでの大しくじりとなりました。

伊東校長の樺太遠征が不発に終ったことは初めの方でお話をしましたが、その後、先生は北海道を崇仁校の卒業生たちの開拓地にしようではないかと考えられ、「呑海」の先生方を視察に派遣されたことがありました。この先生方の出発間際に、伊東校長は「思い切ってあちらこちらを

見て来て下さい。もし金が足らなくなったら電報を打ちなさい。」といわれたというのです。先生方はそれに勇気づけられ、大変高価な旅行をしたそうですが、豪放磊落、天衣無縫といわれた伊東校長は、他面、情に厚く、人の心の機微にまで周到な配慮をされました。

先程、広田先生も申されましたが、やはり教育は人です。伊東校長とその選ばれた教師集団あってこそ、異色の崇仁教育も生れたのだと思います。私は、この崇仁教育こそ人権確立の教育、同和教育の源流であり、教育の原点に立ったものであると堅く信じて疑いません。

ご静聴ありがとうございました。